

# 学びや ヨイシスノツコ



写真1、竹内栖鳳「虞美人草」(1920年) =京都市学校歴史博物館蔵

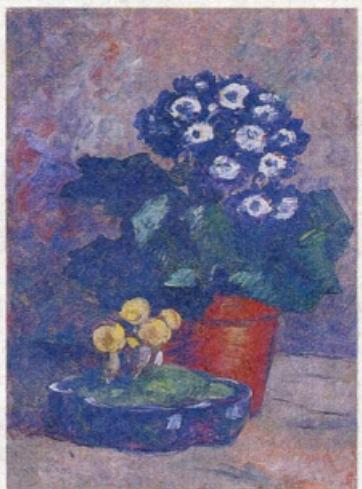


写真2、澤部清五郎「草花図」(1932年)  
翔鶯幼稚園蔵

京都は明治期以後も多くの画家たちの制作拠点でした。画家たちは京都の町に住み、地域社会の中で生活していました。

その中で、画家自身が地域の小学校に通つた。京都は明治期以後も多くの画家たちの制作拠点でした。画家たちは京都の町に住み、地域社会の中で生活していました。画家が子や孫の通う学校のために寄贈した絵画を紹介します。明治から昭和にかけて、お世話になったお礼

た。そうしたつながりを示す作品が今も残されていました。今日はその中から、画家が子や孫の通う学校のために寄贈した絵画を紹介します。明治から昭和にかけて、お世話になったお礼

男は1920(大正9)年に城異小(中京区)を卒業しました。半年後、担任であった辻本庄太郎先生のところへ栖鳳の妻が訪ねてきました。そしてお世話になつたお礼

ました。

この作品「虞美人草」(元初音中蔵)を贈つて、翔鶯幼稚園(上京区)には、明治～昭和の洋画家澤部清五郎の「草花図」(写真2)が飾られています。澤部は西陣に生まれ、川島織物の図案や織物原画も手がけるなど西陣地域と縁の深い画家でした。この作品は1933(昭和7)年、孫の入園記念にと

## 子と保護者の姿垣間見え

にと栖鳳が描いた1本の掛け軸を贈つたといいま

す。初音小(中京区)のため

に、「税所敷子孝養図」

こうした作品からは、普段あまり語られない画

家の一面が見えてきます。それは、学校に通う子どもとの保護者としての姿です。画家もまた、一

学区民でした。